

「ぶどうの木」

ヨハネの福音書 15:1~27

初めに

今日の箇所も、イエシュアが十字架にかかれる前夜の弟子たちへの最後のメッセージとして記されています。最後の晩餐においてぶどう酒の入った杯を掲げて語られたのか、あるいは弟子たちを外に連れ出し、近くにあったぶどうの木を指して語られたものかは解りませんが、このぶどうの木を用いて話し始められています。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ 15:1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。

「ぶどう」は私たちの日本でもよく知られ、また食べられている果物ですが、当時のイスラエルでも同様、或いはそれ以上に親しまれていた果物でした。このぶどうを用いたこんな表現が旧約聖書にあります。

【新改訳改訂第3版】 I 列王記 4:25

ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの下で安心して住むことができた。

これはダビデの子ソロモンの治世を表した記述です。ソロモン王の時代の40年間、イスラエルには全く戦争が起こりませんでした。それがこのように、「ぶどうの木」が「安心して住む」ということの表現として記されています。創世記の「ノアの箱舟」のあのノアも、大洪水の後、新しい地においてぶどう畑の農夫になったことが記されています。このように「ぶどうの木」とは長い平和の時代を意味する植物なのです。なぜこの「ぶどうの木」と平和が結びつくのかと言いますと、育てるのに非常に手間のかかる植物だからです。こまめに手入れをしないと畑はたちまち荒れてしまいました。また種を蒔いてから最初の実を収穫するまでに当時6~7年ほどの時間がかかったそうなのです。働き手である男性が頻りに戦地に行かされるような時代では、このぶどうを育てることなどできません。ですからぶどうを育てることができるほどの環境、それが「安心して住むことができた」時代、すなわち平和な国を象徴する植物であったということです。またぶどうの実から作られたぶどう酒は、喜びの象徴でもあり、結婚式などの祝い事には絶対に欠かせない飲み物でした。そんな平和と喜びの象徴である「ぶどうの木」を指して、イエシュアは「わたしはまことのぶどうの木」とであると語られ、また御父である神様がその「農夫」とであると語られました。ぶどうは非常に手間のかかる植物です。ですからこのぶどうの木が実を結ぶかどうかは「農夫」の腕にかかっていました。

1. とどまる

15:2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

ぶどう畑の農夫の代表的な仕事がこの「刈り込み」です。実を結ばない枝や余計な葉を切り落として、実を結ぶ枝に十分な栄養が行き渡るようにするのです。この「刈り込み」をしないと、「ぶどうの木」は良い実

を結ぶことができません。イエシュアは「まことのぶどうの木」ですから、「刈り込み」で取り除かれる「実を結ばない枝」とはイエシュアを受け入れない者のことであり、逆に「実を結ぶ枝」とはイエシュアを信じ、受け入れる者を指し示していると考えられます。

15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、もうきよいのです。

「あなたがたは…きよい」とは聖別された、神様に選ばれ、受け入れられた存在だということです。イエシュアを信じない者は「刈り込み」のように取り除かれ、イエシュアを信じ受け入れる者は「実を結ぶ枝」、「きよい」者として神様に受け入れられるのです。

15:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

イエシュアに「とどまりなさい、とどまります、とどまっていなければ、とどまっているなら」と、「とどまる」ことが繰り返し述べられています。つまりこの「とどまる」ということがいかに重要なことであるかということです。なぜならこの「とどまる」ことがなければ、わたしたちは「何もすることができない」と語られています。それはつまり、生きることができないということです。

【新改訳改訂3】伝道者 9:4

すべて生きている者に連なっている者には希望がある。生きている犬は死んだ獅子にまさるからである。

すべての生物は生きてさえいれば、たとえそれがどんな小さなことであつたとしても、何かをすることができます。ですから「何もすることができない」とはすなわち「死んだ」状態を指し示していると考えられます。ですからイエシュアに「とどまる」とは生きることに直結します。ではイエシュアに「とどまる」とはどのような状態を意味するのでしょうか。ここで「とどまる」と訳されているヘブル語はダーヴァク(דָּוָק)です。このダーヴァクが聖書で最初に使われている箇所に大きな意味があると考えられます。

【新改訳改訂3】創世記 2:24

それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

このように、ダーヴァクは「結婚」を指し示しています。私たちがキリストすなわちメシアであるイエシュアの妻となること、これがダーヴァクに表された「とどまる」ことの意味だと考えられます。当時のイスラエルでは女性が幸せに生きる道は、この結婚することしかありませんでした。現代では受け入れがたいことかもしれませんが、結婚して一人の夫の妻となり、子どもを産んで育てることが女性にとって生きることのすべてでした。ですから結婚のない人生などあり得なかったのです。このように、当時の女性の生き方の中に私たちが永遠に幸せに生きる道は、イエシュアに「とどまる」ダーヴァクされること以外にはあり得ないということが

表されていると考えられます。

またこの「とどまる」ことをアーマド(ἄμαρ)訳しているヘブル語聖書もあります。このアーマドは「立つ、耐える」という意味の動詞ですが、最初の箇所がこれです。

【新共同訳】創世記 18:8 アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

ここで「そばに立って」と訳されているのがアーマドです。このようにアーマドには本来「給仕をする、仕える」ために、仕えられる者のそばに「立つ」という意味があるのです。先ほどのダーヴァクにしても夫と結ばれる妻の役割は夫に「仕える」ことですから、どちらにしても同じような意味であると解釈できます。

2. 火の池

15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

当時、結婚していない女性は売春婦か奴隷、もしくははやもめでした。また男性が何等かの理由で働くことのできない場合は、物乞い、乞食になりました。これらの人々には社会的地位はおろか何の権利もなく、人々から軽蔑され、誰も手を差し伸べる者のない、見捨てられた存在でした。しかしイエシュアの花嫁とならない者、その御側に仕えることを拒む者は、それよりももっとひどい状況に置かれます。すなわち「それを寄せ集めて火に投げ込まれることになります。これを筆者であるヨハネは黙示録において「いのちの書に名のしるされていない者」と呼んでいます。

【新改訳改訂第3版】黙示録 20:13~15

20:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。

20:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

現代は多様化の社会となり、人々は様々な生き方を選択できる時代です。しかしそんな私たちが行き着く先は二つの選択肢しかありません。それはすなわちイエシュアを信じ、受け入れ「とどまる」者となることと、そうでない者の二つのみです。「とどまらない者」に与えられる道は、この「火の池に投げ込まれた」と書かれてある通りです。

3. ほしいもの

15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

15:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。

イエシュアにとどまらない者が、火に投げ込まれる「火の池」の出来事は、黙示録が記しているいわゆる「終わりの日」、神様のご計画の最終段階に起こる事です。ですからこのイエシュアにとどまる者が「何でもほしいものを求め…それがかなえられます」という事実もまた今のこの時を指して言われているのではないと考えられます。しかしどんな願いごととも叶う世界とはなんと素晴らしいことでしょうか。イエシュアに「とどまる」ことでもなくそれが与えられるのですからこれは非常に興奮すべきメッセージです。ではあなたは神様のご計画が完成するその時に一体何を願いますか？「何でも」と語られていますのでもちろん所有物や財産なども含まれているとは思いますが、ここではかなえられることで「多くの実を結ぶ」と示されていますので、これは物というよりは行為、働きを指していると考えられ、「ほしいもの」というよりはむしろ「やりたいこと」を求めることだと考えられます。しかもそれは「実を結ぶ」つまり成果や結果の出ることであり、何らかの生産性を持った仕事や働き、つまり作り出したり、増やしたりすることであると考えられます。しかし仕事や働きといっても、やりたくもない仕事を押し付けられるのではなく「何でもほしいものを求めなさい」と示されているように、自分が心から楽しんでできる「やりたい仕事」をすることができるということです。しかもそれは父なる神様が栄光を受けるために「多くの実を結ぶ」こと、つまり大成功することがすでに約束されています。まさに「何をしても栄える」としたら、あなたは一体何がしたいですか？どんなことをしてみたいですか？この問いかけをぜひ思い巡らしてみてください。なぜならそれは決して虚しい空想や妄想とはならず「あなたがたのためにそれがかなえられます。」という神様の約束につながっているからです。

4. 愛

15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

15:10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

イエシュアにとどまるとは、イエシュアの「愛の中にとどまる」ことであることが示されています。愛がまるで場所や建物のように表現されています。なぜなら愛はヘブル語でアーハヴ(אהבה)と言い、このアーハヴを構成する三つのヘブル文字には「神の見る家」という意味が表されており、それはすなわち神様の国、御国を指し示しているからです。「愛の中にとどまる」という日本語では非常に抽象的でつかみ辛い表現が、聖書の原語であるヘブル語では「御国の中に生きる」という具体的、実際的な意味を読み取ることができます。

15:11 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。

たとえ神様が素晴らしいご計画をお持ちで、それが私たちにとっても非常に良いものであるとしても、それが一体何で実際にどのようなものであるのかが理解できなければ「喜びが満たされる」までには至りません。かつてイスラエルの民も聖書も存在していなかった頃、彼らの先祖アブラハムは、神様の約束をこのように理解しました。

【新改訳改訂第3版】ヘブル 11:8~10

11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

11:10 彼は、**堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた**からです。その**都を設計し建設されたのは神**です。

アブラハムは初め「どこに行くのか知らない」、つまり神様のご計画を理解していない者でした。しかし彼はその生涯の中でそれをこのように理解するのです。「神様によって設計され建てられる、堅い基礎の上に建てられる都」、これを待ち望むことがアブラハムの信仰となりました。つまり彼の信仰は抽象的なものに対して向けられたものではなく具体的、実的なものに目を留めていたのです。愛するというヘブル語アーハヴは神様の国、御国を指し示していると述べました。このアブラハムはまさにアーハヴという「愛の中にとどまる」者であったと言えます。多くの資産を持ちながらも家も町も建てず、生涯天幕に住み続けた彼の生き様に、彼がどれほど御国を喜び待ち望んでいたかが表されていると考えられます。このように、具体的なものに向けられた信仰は、実的な生き方に大きな影響を及ぼしますが、抽象的な信仰はそれが弱いのです。ですからイエシュアはその公生涯のすべてを神様の国、御国について宣べ伝えるだけに集中したのです。「あなたがたの喜びが満たされ」、アブラハムのように、御国を待ち望む生き方にとどまり続けることができるために。

15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。愛することがアーハヴであり、神様の国、御国を指し示すものであるならば、この御言葉はこのように言い換えることができます。

「わたしがあなたがたに御国を宣べ伝えたように、あなたがたもそれぞれ御国を伝え合いなさい。」それがイエシュアの戒めであると信じます。

5. 友

15:13 人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

イエシュアは愛する者、すなわち御国を待ち望む者を「友」、ヘブル語でヤーディー(רֵעִים)「愛する者」と呼ばれました。イエシュアはこの「友」が実際に御国に入り、住まうことができるように十字架にかかり、そのいのちを捨てられました。

15:14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。

イエシュアの言われたこの「友」とは何でしょうか。それはまず第一に「イエシュアが命じることを行う」者、すなわちイエシュアに聞き従う者であることが解ります。

15:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

そして第二に「友」とは、「主人のすることを知る」者であり、それを「御父からすべてを聞かされる」者のことであると考えられます。旧約聖書においてイスラエルの民は「主のしもべ」と呼ばれていました。

【新改訳改訂3】 I 歴代 16:13 **主のしもべイスラエルのすえ**よ。主に選ばれた者、ヤコブの子らよ。

しかし御国が来る時、彼らイスラエルの民とそれにつながる異邦人たちとは、もはやしもべとは呼ばれず「友」と呼ばれることが示されていると考えられます。以前サマリヤにいた一人の女性を通してイエシュアはこのように語っておられました。

【新改訳改訂第3版】 ヨハネ 4:25~26

4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、**いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。**」

4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

このように、神様の国、御国においてイスラエルの民が、そしてそれにつながる異邦人がどれほど重要な存在であるかが示されていると考えられます。またイエシュアの語られたこの言葉を直接聞いた弟子たちについては更にこのように約束されています。

【新改訳改訂3】 マタイ 19:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。

このように、イエシュアの「友」は、「世が改まって人の子が栄光の座に着く時」すなわち御国が実際に到来した時に起こされる存在であると考えられます。これらのことはすべて神様の主権による選びによるものであり、人の側にその選択権はありません。

15:16 **あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。**

先ほど語られていた「何でも…かなえられる」とは、このイエシュアの「友」と呼ばれる者に対する約束であると考えられ、またそれはイエシュアの任命に従って働くことによって受けることができる報酬であると考えられます。イエシュアが語っておられる御国とは、メシア王国、千年王国とも呼ばれるイエシュアを王とし、イスラエルを中心とした世界統一国家です。そこは今のこの社会のシステムから大きくかけ離れたものではなく、国民それぞれに果たすべき役割、働きがあり、それに対して必ず報酬が支払われるという仕組みであるようです。ただその報酬とはお金ではなく「何でも…与えられる」というものです。さあ、あなたは何を求めますか？

6. もう一度

15:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。

先ほど 15:12 で語られていたことがもう一度念を押すように記されています。「愛する」ことがいかに重要であるかということです。しかしそれがアーハヴに表された神様の見る国、すなわち御国を指し示すものでなければなりません。世間一般で理解されている、いわゆる「愛する」という行為をしたところで、誰が御国を待ち望むことを知ることができるのでしょうか。アブラハムは大変な資産家でしたが生涯天幕生活をするという形で御国を待ち望む姿勢を生き様で表現しました。イエシュアにいたっては

【新改訳改訂3】マタイ 8:20 すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」

という生き様で表され、また弟子たちにもこのように命じられました。

【新改訳改訂第3版】マタイ 10:7~10

10:7 行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。

10:8 病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出さなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

10:9 胴巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。

10:10 旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。

これがイエシュアの語られた「愛する」という行為、生き方、生き様であると考えられます。つまりはこういうことであると考えられます。

【新改訳改訂3】ヘブル 11:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。

神様のご計画の成就である御国を「はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白」する生き方、生き様、それがイエシュアが御国における「友」に、今を生きる上での戒めとして与えられた「愛する」ということの意味であると考えられます。このような生き方は、この世と完全に逆行する考え方です。決して受け入れられるものではありません。

7. 迫害

15:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。

15:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたが

たは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

15:16 で語られた「わたしが、あなたがたを選んだ」というメッセージがここで繰り返されています。イエシュアに選ばれるということは、同時にこの世から憎まれることであることが語られています。世間一般的な解釈での「愛する」という行為をしたところで、誰が憎まれるでしょう。むしろその行為は称賛され、受け入れられます。「愛する」ことをテーマにした物語や歌は人に感動を与えます。しかしイエシュアに聞き従う者はこの世に受け入れられず、憎まれるのです。ですからこの箇所からも「互いに愛し合いなさい」と言われたイエシュアの戒めが、この世のそれとはまったく違う意味であることが解ります。

15:20 もしべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。

15:21 しかし彼らは、わたしの名のゆえに、あなたがたに対してそれらのことをみな行います。それは彼らがわたしを遣わした方を知らないからです。

神様の国、御国を宣べ伝えるなら、大前提として必ず迫害されることを覚えなければなりません。受け入れられなくて当然なのです。今日でもなお多くのユダヤ人がイエシュアを、そして教会を憎んでいます。その憎悪は相当なものです。新約聖書を悪魔の本と呼び、「イエシュアを十字架につけた我々の先祖を誇りに思う」とさえ叫んでいます。また一方ではイエシュアが自分たちと同じユダヤ人であることさえ知らない者もいます。

15:22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし今では、その罪について弁解の余地はありません。

15:23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいるのです。

イエシュアと御父である神様はひとつです。ですからたとえ神様を信じると言ってもイエシュアを受け入れないならそれは本当に信じているとは言えないのです。なぜならイエシュアはただ御父のご計画だけを成し遂げるために、御父から遣わされて来た御方だからです。ですからイエシュアを受け入れず、返って憎む者は御父を憎んでいることと同じなのです。

偶像のはびこるこの世界で、目で見ることのできない、耳に聞こえない神様を信じることが容易なことではありません。ですから見える形で、人となってイエシュアが遣わされたのです。イエシュアは神様にしか成し得ない多くのわざを行い、耳に聞こえる声で御国を告げ知らせました。それにも関わらずイエシュアは、神様のご計画は多くの者に受け入れられなかったばかりか、イエシュアは十字架にかけられて殺されるのです。ですから神様の国、御国を宣べ伝える者が迫害を受けることは当然のことなのです。

15:24 もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったのなら、彼らには罪がなかったでしょう。しかし今、彼らはわたしをも、わたしの父をも見て、そのうえで憎んだのです。

15:25 これは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。

なぜ迫害されるのか、なぜ受け入れられず、憎まれるのか。その理由をイエシュアは聖書に書かれている御言

葉が成就するためだと述べておられます。

【新改訳改訂3】詩篇 35:19 偽り者の、私の敵を、私のことで喜ばせないでください。ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないようにしてください。

【新改訳改訂3】詩篇 69:4 ゆえなく私を憎む者は私の髪の毛よりも多く、私を滅ぼそうとする者、偽り者の私の敵は強いのです。それで、私は盗まなかった物をも返さなければならないのですか。

このように、「ゆえもなく私を憎む」という表現がたしかに記されているのですが、メッセージの中心となるような、それほど重要な部分ではないように思えます。しかしイエシュアはこのようにも語っておられます。

【新改訳改訂3】マタイ 5:18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

どんな小さな御言葉でもそれは神様の御言葉であり、そのすべてを世に表すためにイエシュアは遣わされました。「律法中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」とある通りです。だとするならば、聖書全体に貫かれた神様のご計画である神様の国、御国の到来が成就しないわけがあるでしょうか。聖書に記されたことは「全部が成就されます。」とある通りです。

15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかします。

15:27 あなたがたもあかしするのです。初めからわたしといっしょにいたからです。

迫害に耐え、その中でも大胆に御国を宣べ伝えることができるように、御父は助け主である真理の御霊を遣わしてくださいました。「あなたがたもあかしするのです。」とある通り、私たちの考え方、生き方、生き様が、ますます御国を待ち望む者として真理の御霊によって整えられていくようにと祈りましょう。